

「よいか、豆にコツコツ頑張れば、いつか必ず大成する。頑張りなされや」とお釈迦様が仰ったので「豆」という本を書く事にした。しかしよくよく調べてみるとこの場合の「まめ」とは「忠実、勤勉、誠実」という意味らしく、食べる豆とは関係ないらしい。もしかしたら大豆のように、小さいが育てばもやしになり枝豆になり、煎ったら鬼にも投げれるし茹でれば豆腐になるし腐れば納豆になるし味噌にも醤油にもなることから「小さな物でも必ず大きく育つ」そういう意味なのですね？と枕元に聞いてみたがお釈迦様はもう二度と現れてくれななんだ。間違えた事を恥じているのかはたまた本当にあれはお釈迦様だったのか…わからないがマメに続きを書く事にした。

～公演チラシより～

登場人物 僕・鬼頭洋一

星野

山本ユウキ

部長

佐伯かなこ

隣の奥さん・岩永

山本の彼女・みほ

吉田さとし

僕の家は1Kのマンション。

三畳くらいの洋室に、ベッドと小さなテーブル、本棚が一つある。

奥には一畳程度のキッチンがある。

夜、友人を連れて帰って来た。

友人はコンビニで買った缶ビールをビニール袋に提げている。

僕 本当に、本当に小さな部屋なんだ。何も無いし何も面白くない。

星野 いいかい、鬼頭君。僕はね、世の中になんにも面白くないことはないと思ってるんだ。久しぶりに会えたんだよ、これだけで充分面白いじゃないか。

僕 テレビも無いんだ…。

星野 いいかい鬼頭君。僕はね、テレビが面白いなんてこれっぽっちも思っていない。僕らは話をするんだ、これからの日本の話をね。

僕 そんな大きなテーマで話せる自信無いよ…。

星野 こっちかい？

僕 立ち止まる。

星野 あ、ここかい？

僕 うん…。

星野 キレイなマンションじゃないか。

僕 本当に狭いんだ、三畳のワンキーだから。

星野 僕の家は、もっと狭いんだよ。

僕 え？ワンルームって事？

星野 さあ入ろう、立ち話もなんだ。

僕 散らかってるだろうな…。

僕と星野、部屋に入る。

僕 ほら散らかってる…。

星野 独り暮らしには十分な広さだ。

僕、床に置きっぱなしの洗濯物などを隅に固める。

僕 どこに座ればいいかな…。

星野 好きに座ればいいさ。僕も好きな所に座る。お邪魔します。

僕 コップも一個しか無いし…。

星野 このままでいいよ。そっちは台所かい？

僕 あ、うん。冷蔵庫が備え付けでついてあって、ユニットバス。

星野 これで家賃が？

僕 四万五千。

星野 なるほど。

僕、小皿につまみを出して持って来る。

僕 場所がいいから…。

星野 じゃあ乾杯。

僕…乾杯。

星野 僕等の再会に。

僕 明日、早いんだ。

星野 日曜日じゃないのかい？

僕 仕事なんだ。

星野 忙しいんだな。

僕 そうなんだ、この前休みを貰ったのはいつだったのかも覚えてないんだ。

星野 最近ほごも一緒さ(部屋を見回す)。

僕 散らかってるけど、汚くはないんだよ。全部洗濯したやつだから。

星野 洗濯機は、外かい？

僕 ベランダがある。

星野 洗濯物をたたみ出す。

僕 あ、いいよ。

星野 僕はこう見えて、几帳面なんだ。さっきの店だって、しょっちゅうテーブルを拭いてたろ。あれ無

意識でやつちゃうんだ。

僕 そうなんだ…。

星野 潔癖症じゃあないんだよ、きれい好きただけなんだ。

僕 うん。

星野 誤解しないでくれ給えよ。

僕 うん。

僕 つまみをつまんで食べた。

星野 …。

僕 僕は洗濯物をたたむのが苦手だね、君は上手にたたむ。

星野 それは、ピーナッツかい？

僕 なんだろう、何かの種かな。どうぞ。

星野 種？

僕 うん、種だ。

星野 君は、なんだかわからない種を食べているのか？

僕 貰い物だから、よくわからないよ。

星野 ピーナッツは、あれはなんだ？

僕 落花生だろ。

星野 あれは種じゃないだろうな。

僕 うん、種じゃあないとは思うけど、よくわからない僕には。

星野 僕はね、種と豆の違いがよくわからないんだ。

僕 僕もわからないよ、種と豆の違いなんて考えた事もない。

星野 じゃあこうしよう、食べられる種の事を豆という事にしよう。

僕 大豆は、あれは種かい？

星野 種だろうさ。だってあいつから芽が出るんだろ。種だろう。枝豆だって、植えたら枝豆が生えるんだろってさ。

僕 じゃあ枝豆を食べずに植えたら、その何倍も枝豆が食べられるのかい？

星野 そういう事なんだ。

僕 君は賢いな、そんな事考えた事も無かった。

星野 人生はね、効率よく生きなくちゃあダメだよ。

僕 僕は、枝豆がほんとに好きだね…。

星野 君もか。

僕 君もかい？

星野 ははは。

僕 だけど、袋からいちいち一粒一粒取り出すのが面倒だね、誰かあれを剥いた状態で出してくれないものだろうか。

星野 君はあれを袋と呼ぶのか。

僕 だって袋だろ。

星野 じゃあカニも面倒臭いかい？

僕 そうなんだ、同じ理由さ。

星野 君は相当な面倒臭がり屋だ。

僕 袋から出された状態の枝豆を、どんぶり一杯レンジで食べたいんだ。

星野 情緒もへつたくれもないじゃないかそりゃあ。

僕 熱々の枝豆に、しょうゆとバターを乗せて食べるんだ、旨いんだ、きっと。

星野 やつたらいいじゃないか、僕が剥いてあげるよ。

僕 いいよ、それは夢だから。死ぬ前に食べるんだ。

星野 いいかい、死ぬ前にそんな食欲はない。食べた時に食べておかないとちや。

僕 そうだね、じゃあいつか、どうしようもなく暇な時に、枝豆をひたすら剥くとしよう…。

僕 静かにビールを飲む。

星野 …君はなんだか、疲れている。

僕 ちよつと酔っ払ってしまった。

星野 ちゃんと休まないとダメだよ。

僕 休みが無いって言ってるだろ。それなのにちよつともお金が貯まらないんだ。年金が高すぎるんだ。僕  
はこんな苦労を子供達にはさせたくない。だから子供はたくさん作るよ。たっくん作る。そう思っ  
ても三十五になっちゃったがね。僕はね、お年寄りの為に働くのは良いんだ、だが僕の事は誰が養  
てくれるんだい。

星野 今日の同窓会で、気になる子は居なかったのかい？

僕 もうみんなおぼちゃんだぜ、気持ち悪い。顔も名前も覚えてないよ。僕は高校生の頃、女子生徒と一  
言も言葉を交わした事が無かった。卒業式の日、女子生徒が二人僕の背後で「あれ？こんな子居たっけ？」  
って話してた声は一生忘れないよ。

星野 (洗濯物をたたみ終え) どこに仕舞えばいい？

僕 (受け取り) ありがとつ。

僕、ベッドの下に潜り込ませる。

星野 そんなところに仕舞うと、ホコリがつくんじゃないかい？

僕 さつきも言ったが汚くはないんだ、散らかってるだけで。

星野 そんな君が同窓会、良く来てくれたね。

僕 会費がタダだったからさ。じゃなかったら絶対行かない。飲み会なんてたいてい満足に( )飯食べられ  
ないんだ。三千円も払って、結局ビール一杯と枝豆だけなんてお札をトブに捨てるようなもんさ。

星野 先生が払ってくれたらしいよ。

僕 それも年金だからあのじいーだったら現金で返してくれた方がよっぽどいいよ！

僕、ビールを一息で飲んだ。

星野 君はほとんど休みが無いと言ってたね。

僕 そうだよ、毎日毎日働きつめたよ。

星野 何時に家を出るんだい？

僕 朝七時。もうそろそろ寝なきや。明日は面倒な仕事だ。

星野 帰りは？

僕 たいてい七時を過ぎた頃かな。

星野 じゃあ僕と全く反対じゃないか。

僕 そうなのかい？

星野 僕は夜の仕事なんだ。昼間はたいてい寝てる。

僕 今日は？

星野 久しぶりに休みを貰った。こういう事が無い限り休みを貰おうなんて思わないから。

僕 そうか、そういう考え方もあるのか。

星野 じゃあ昼の間は、ここは空き家なんだね。

僕 空き家じゃあないよ、留守にしているだけだから。

星野 でももつたないじゃないか、誰も居ないのに家賃は払ってるんだろ？

僕 …まあね。

星野 使つてないのに。

僕 そうだね。

星野 よしこうしよう、昼間の時間は、僕がこの部屋を貸りようじゃないか。

僕 ……え？

星野 これで君の家賃は半分で済む。もちろん光熱費も半分さ。僕は朝七時頃、ちよつと君が出掛けた頃  
に帰って来て君が帰ってくる頃には出掛ける。もともと寝るだけだから持ち物は服くらいさ。何か邪魔  
になるような物は置かないと約束しよう。テレビも見ないしね。どうかな。

僕 …それは、一緒に住むって事かい？

星野 お互いの生活の時間が違うんだから顔を合わせる事はない。一人で暮らしてるのと何も変わらない。

君は毎日いつも通り働いだけで、家賃が半額になるんだ。

僕 …おい、それは、なんだかとても良いことのように聞こえるよ。

星野 君はどうせ夜中に洗濯して夜中に取り込んでるんだろ。僕が居れば、昼間に洗濯して昼間に取り込

んでやる。

僕 …君は、きれい好きだからな。

星野 いいかい人生はね、効率良く生きなくちゃダメだよ。

僕 うん、うん…

星野 ここはまだ小さくて何も無いけれど、いずれ僕等はここから大きく育つ。この部屋は僕等にとつて

ちょうどいい、始まりにはびつたり部屋のなんだ。

僕 うん、わかった、頑張る！（立ち上がる）。

と、山本がやってきて、

山本 どう行くんですか？

僕 今日はお見合いなんだ。あんまり気が乗らないけど部長の紹介だから断れなくてイヤだなあつて思つてたけどこれから僕は頑張ると決めたからつて君は誰だ？

山本 サラリーマンはそういうのが大変なんですよ。

星野 それは是非頑張つてきたまえ。

僕 ねえ星野君、誰？

星野 彼は山本君と言つてね、劇作家をやっているんだ。

僕 うん…

山本 どうも、山本です。

僕 …鬼頭です。

僕 部屋を出ると、後目になっている。

会社の上司がやつてきた。

部長 ああ、来た来た。

僕 おはようございます。…今日は、よろしくお願い致します。

部長 君は、そのスーツしか持つてないのかね？

僕 はい…

部長 明るいネクタイをした方がいいね。

部長 鞆からネクタイを取り出す。

僕 あの、部長…

部長 君は顔がワイルドだからね、このくらいの方が良いだろう。

僕 私は、この通りの性格ですので、失礼な事になりはしないかと

部長 資料は、目を通してくれただろうね。

僕 あ、はい。

部長 良いお嬢さんだろう？

僕 いや本当に、恐縮至極であります。

部長 上手く話に乗つて行かないとダメだよ。

僕 はい、承知しております。

部長 あ、来ましたよ。時間びつたりだ。

かなこ、やつてくる。

部長 おや、お一人ですか？

かなこ …。

部長 こちらが、佐伯かなこさん。

僕 はじめまして…

部長 鬼頭洋一君です。

僕 鬼頭と申します。

かなこ …。

部長 じゃあまあ、堅苦しい自己紹介は、抜きにして、どうかね、立ち話もなんですから、座りましょうかね。

部長と僕、その場に座る。

かなこ、立つたまま。

部長 かなこさんはね、ほら、君も行ったことがあるだろう、小山建設の、

僕 あ、はい。

部長 あそここの事務をやられてるんだ。

僕 はい。

部長 いつもくもくと仕事していらつしやつてね、実に勤勉なお嬢さんなんだ。

僕 はあ…。

部長 鬼頭君もね、もくもくさにかけては負けてはおらんのですよ。いつも実にもくもくと仕事をしておられます。いつもあれは何をやっているんだい？私が知らなくてどうするんだという話ですな、ははは。

僕 ははは…。

かなこ…。

部長 鬼頭君は、趣味は何かな。

僕 趣味は…、読書、ですかね…。

部長 読書、かなこさんもね、読書が趣味だと伺っておりますよ。

かなこ…。

部長 いいですよねえ、読書は。どんな本を読むんだい？

僕 あ、えー、歴史ものを…。

部長 歴史。うん、「歴史」なんて言葉があるくらいですからね。かなこさんもね、歴史が好きだという事でね？

かなこ…。

部長 うん。鬼頭君は、あれかい？嫌いな食べ物なんか、あるんだったかい？

僕 あ、えー、えー、

部長 ブロッコリーが嫌いだったね。

僕 あ、はい。ブロッコリーが、はい。

部長 かなこさんは、嫌いな食べ物、何かありますか？

かなこ…。

部長 ブロッコリーはね、何が嫌いなんだい？

僕 えー、

部長 あれは、「木」みたいだからね。グーグルアースで、公園の上を写真とか見ると、ブロッコリーがいっぱいだなって思うよね。うん。森のね、ブロッコリーのね。うん。

かなこ…。

部長 学生時代は君何をやってたの？サッカーやってたの？

僕 あ、はい。

部長 どういうポジションは？

僕 あ、えー、左のハーフ、です。

部長 ミッドフィールダーって奴だね。うん。それでなに？上手かったの？

僕 いや全然、三年間やって、試合に出たり出なかったり。

部長 補欠だ。

僕 まあ、はい。

部長 補欠も、サブとか言うのかね、最近は。

僕 あ、さあ、どうなのでしょう。

部長 かなこさんは、あれですよね？卓球部。

かなこ…。

部長 卓球部なんですよ。

僕 はあ。

部長 じゃあ後は若い二人に任せて、年寄りはおいとましましょうかね。

僕 …部長。

部長 じゃあ、頼んだよ。

僕 あ…。

部長、僕の肩に手を置き、去っていった。

長い沈黙。

僕 …彼女はそれから三時間、一言も喋らずた立っていた。いつの間にか日が暮れて、雨が降ってきた。

かなこ、去る。

僕 そして彼女は帰って行った。

部屋では、星野が山本にノートを見せている。

星野 連絡ノートを作った方が良いんじゃないかと思ってね、僕が提案したんだ。ここにお互いが居ない間の事、気付いた事などを書いて行く。昼間に宅配便が来た、洗濯をした、食器を洗った、何時に家を

出て何時に帰宅したか。

山本 こんな事まで書くんですか？

星野 これはね、光熱費の為に書いてあるんだ。僕は構わないと言ったんだが、昼間と夜では電気の使用量が違うから電気代が折半なのはおかしいって彼が言ったんだ。だから、光熱費も時間で割るようになった。

山本 細かいな（ノートをめくる）。

星野 月々の家賃と光熱費は、このデイズニーに入れておく。

星野 デイズニーランドの克蘭キーのアルミの箱を取り出す。

僕 帰ってきて、ベッドに横になる。

星野 お帰り。

僕 たいま。

星野 ノートはただの連絡帳のはずだった。だけど帰宅する時間を書いてみると、なんだかその理由も一緒につけたくなるもので。

僕 今日九時に帰宅した。新しい仕事を覚えなくちゃならなくなったから忙しい。

星野 それは良かったじゃないか、頑張れ。

僕 ありがとう！

星野 それからはだんだん鬼頭君の日記色が強くなってきた。おかげで僕は鬼頭君の日記を毎日読んでいくという訳さ。

山本 これは、僕も読まなきゃいけないんですか？

僕 君と共同生活を始めてから、なんだか僕の運気は上向きた。いろんな事が上手く行っている気がする。

星野 そっか、僕も嬉しいよ。

僕 気がしたけど、違った。

星野 ん、どうした急に？...というように感想も書くようにしているんだ。

山本 すいません、今のは、二日掛かっている訳ですか？

星野 そっだね。

山本 ...なるほど。

星野 ん？

山本 なんだか交換日記みたいですね。

星野 気持ち悪いなんて誰も思っちゃいないよ。

僕 今日もかな...さんは会社の前で待っていた。彼女にしたら隠れているつもりらしいけど、僕はすぐわかった。声を掛けようか一瞬迷ったけど、彼女は隠れているつもりだから声は掛けない方が良いと思っ

た。

星野 それは声を掛けた方がいいだろうね。隠れている風の見つけて貰いたいというサインなんだ。

僕 君がそういうから今日こそ声を掛けようと思っただけややはり勇気が無かった。彼女、最初は壁から八分の一だけ身体を出して、片眼でこちらを見ていたんだけど、次の日からはだんだんと身体が出て来ているんだ。その次の日には半分出て、今日なんか全部出て普通に立ってた。僕はもうなんと云った方がいいのか判らなくなってしまっ、それでも気付かないふりをして帰って来たんだ。

山本 ...なんですかこれは、怖い話なんですか？

星野 いや、本当に怖いのはここからなんだよ。

僕 彼女は毎日毎日後をつけてくる。何も言わずにちよつとずつ距離を詰めてくるんだ。今日はとうとうマンションの向かいまで付いて来た。これで僕のマンションが彼女にバレってしまった。

「ピンポーン。」

僕、顔を上げて、固まる。

「ピンポーン。」

「ピンポーン。」

僕は堪える恐るドアのそばまで行く。物音を立てずに。

「ピンポーン。」

「ピンポーン。」

のぞき穴を覗いて、また部屋に戻る僕。

「ピンポーン。」

「ピンポーン。」

女の声 隣の岩永です。

僕 ...はい、何か？



隣の奥さん・岩永 タバスコの小瓶を持って立っている。

岩永 タバスコを借りたんです。昼間。

僕 あ、タバスコ？

岩永 ありがとうございます。

岩永 去っていく。

僕 タバスコ、返しに来たよ。

星野 いや、僕は貸してないよ。

僕 …でも返しに来た。

星野 台所に置いておいてくれ、確認してみるから。

僕 わかった。

僕、台所にタバスコを置いて戻って来る。

星野 それでね、次の日台所を見ると、タバスコなんてどこにも無いんだ。

山本 え？

星野 うん。

山本 どういう事ですか？

星野 さあ、これで僕はなんだかわからない感じになってしまった。鬼頭君に確認しようにも、ノートに書いて返事を聞くには次の日の朝、つまり二四時間待たなくちゃならない。僕はもやもやした気持ちのまま、一時間タバスコを探してみたのさ。

僕 台所に置いておいたよ。おかしいなあ。僕も探してみる。

僕 台所へ。

山本 これは大変だ。たったこれだけのやりとりなのに、三日も掛かっている。

星野 そうなんだよ。

僕 (戻って来て) 本当だ。無い。

星野 そうだろ？

僕 うん、無い…。

星野 無いんだよ。

僕 どうして無いんだろ？

星野 さあ？

僕 おかしいなあ…。

山本 すいません。

星野 ん？

山本 ノートでやりとりしてるんですから、こんな日常会話レベルで話してたら、もうあつという間にその…もつバカですよ。

星野 ん？

山本 もつと要点をただだと書かないと、

星野 僕等は君みたいな劇作家じゃないんだ、普通の人なんだよ？

山本 いや、これは気長すぎますよ。

僕、部屋を見回している。

山本はノートをめぐる。

僕 泥棒だよな？

星野 え？

僕 泥棒に入られたんだよねきつと？

星野 泥棒？

僕 泥棒だ！もうそう思ったら泥棒だ！泥棒に違うない！

星野 ちよつと待ち給え、昼間は僕がずつとここに居るんだよ。いつ泥棒が入るって言うんだい？

僕 最近泥棒が増えてるって誰かが言ってた。世の中がだんだん泥棒に有利な世の中になってるって。

星野 泥棒に有利な世の中ってどんな感じかわからないんだけど、

僕 泥棒だ。泥棒め。人の家に入ってタバスコを盗んでいくなんて、世も末だよ！

星野 いいかい鬼頭君、タバスコだけ持って行く泥棒は、よっぽどだ。

僕 ウチにはタバスコ以上に価値のある物なんて無いんだ…。

山本 タバスコをわざわざ持って行きますかね、泥棒が。

僕 君が家を出て、僕が帰宅する間に泥棒が入ったんだ。

星野 確かに最近の鬼頭君は帰宅するのが九時を越える日が多いんだ。

僕 僕がいけないんだ…。お見合い以来、部長にすっかり気に入られてしまっただけ、仕事をたくさん引き受け過ぎた。だから残業が多い。

星野 じゃあわかった、君がそこまで言うなら警察を呼んでみるかい？

僕 たかがタバスコ一個でマツポの世話になるなんて恥ずかしいったらありやしないよ！

星野 じゃあどうしたらいいんだろうなあ。

僕 僕は本当はついてない男だったんだ。最近ちょっと勘違いして罰が当たったんだ。僕は本当についてないんだ。ついてない男の所には世の中のついてない事がどんどんと集まってくる。僕はついてない事を引き寄せる磁石だ。ついてない事がついてる男なんだ。ついてない事がついてる。

星野 うん、わかったよ。

山本 それで僕が呼ばれたんですね。

星野 じゃあこうしよう。君が帰って来るまでの二時間、僕がこの部屋を借りようじゃないか。

僕 ……え？

星野 朝七時から夜九時までの間、僕がこの部屋を借りる。これで泥棒が入る余地はなくなる。

僕 ……うん、それは有り難いんだけど、

星野 出来るだけ家に誰も居ない時間を作らないようにしましょう。

僕 僕だって毎日残業して訳じゃないんだ。残業じゃない日はどうしたらいいかな？

星野 残業じゃない日は嬉しいじゃないか、自分の為の時間に使える。

僕 うん、まあね。

星野 そんな働き給えよ、せっかく僕がこの家を守っているんだ。思う存分働き給え。

山本 鍵掛けてないんですか？

星野 鍵は掛けているよもちろん。でも鬼頭君言ってる通り泥棒に有利な世の中になってきているんだ。鍵なんかあつてないようなもんだよ。

僕 でもさ、そんな事して君の仕事は大丈夫なのかい？

星野 実はね、僕はここを出て仕事までの間、ファミレスで時間を潰していたんだ、二時間はかり。だから  
ひびきようびこいよ。

僕 ……そんな事一言も言わなかったじゃない！

星野 だって七時からは、僕の家じゃないもの…。

僕 ……星野君、君はそこまで気を遣ってくれていたのか！ありがとう、僕は今、涙を流している。

星野 字が滲む。いいかい、月々二時間一八七五円だから、二時間で三七五〇円。僕は明日から、月々二六二五〇円を払う。君は、一八七五〇円だ。

僕 わお、随分安くなった…。

星野 ややこしいから今月は日割りにしておくね。四月は三〇日だから…。

僕 君は、君は僕の数倍頭が良い…！

星野 いいかい鬼頭君、人間は、頭の良し悪しで決まるものじゃないんだぜ。

僕 おやすみなさい！

星野、立ち上がり、山本と共に夜道を歩いている。

僕はベッドに横になり、ノートを開いている。

星野 とは言ったものの、最初はなんとかなるかと思っただけど、月々二五〇〇円だったものが二六二五〇円になるのはさすがの僕も負担が大きすぎた。たった少額でも払うお金が増えるって言うのは精神的に良くない。

山本 僕は普段ファミレスに居るんです。ほとんど家には帰らない。ファミレスで食事をして仕事をする。

星野 「何をしているんですか？」

山本 「劇作家のはしくれです」

星野 とさういふんだ。作家というだけでも凄いのには、その上にゲキがつくんだからこれはタダ者じゃないと思つた。そこで僕は彼を家に連れて来て、

僕 え…？（ノートを持ってきて上がる）

山本 僕は仕事柄、経験こそが宝だと思つているので知らない人から声を掛けられても割とホイホイ付いて行つてしまふんです。どう転んでも良い経験になるだろうと思つているから。

星野 こっちです。

僕 （ノートに向かつて） ちょっと待って…。

星野 どうだい、狭いけどキレイな部屋だろう。

山本 わ、でも思つたより狭くは…、いや狭いのか。

星野 どうぞ。

山本 お邪魔します。

星野 ファミレスで仕事をしてたんではお金が掛かってしょうがないでしょう。

山本 どうぞ。

星野 どうぞ。

山本 ファミレスで仕事をしてたんではお金が掛かってしょうがないでしょう。

山本 そうなんです。でも僕、家では集中出来なくて。家族も居るし、テレビやインターネット、誘惑が多いから。

星野 コーヒー一杯三〇〇円。他にも頼んでいるね？

山本 フライドポテトをよく食べます。

星野 ポテトは確か二九九円だ。コーヒーと合わせて五一九円。それを十日で五一九〇円だ。ここで君が仕事をしたら、月々二時間二七五〇円で済むんだよ。君の好きなテレビもインターネットもここにはない。ベッドと机があるだけだ。

山本 …確かに、ここならうん、ベッドもあるからすぐに横になれる。

星野 そっだよ。二時間は君の部屋なんだから好きに使っていいんだ。

山本 …僕の、部屋？

星野 君の部屋だ。

山本 ーいーえーい！

山本、ベッドにダイブする。

星野 コラコラ、はしゃぐなよ。ははは。

僕 ねえ、星野君…

星野 これで僕と君の間の二時間は埋まった。

僕 うん、でもね…

星野 山本君は合気道をやっていたらいい。これでいつ泥棒がやってきても大丈夫なんだ。

山本 あいやー！

僕 星野君、無理なら無理と言ってくれば良かったのに…

星野 二四時間を一人で回すより三人の方がより効率的だろう。良く良く考えてみると、家に居る時間なんてそんなに多くない。

僕 それはそうなんだけどね…、道理で最近部屋が散らかっている訳だ。

山本の恋人・みほ、やってきた。

みほ 独り暮らし始めたの？

星野 僕は毎日掃除をしているんだけどね、そうか、山本君か。彼はこのノートを見ていないのかな。

僕はノートを閉じ、部屋を見回して出て行った。

山本 あ、ううん、ここは仕事部屋なんだ。

みほ え、いつからそんな偉くなったの？

山本 話すし長くなるんだけどさ、

みほ うん。

山本 こっち座って。

みほ え？

山本 説明するから。

みほ うん。

山本 ほら、早く（ベッドをポンポン叩く）。

みほ （微笑んで）ここなに？誰かの家？

山本 うんだから、それも話すから。ね、こっち座ってよ。

みほ、台所へ。

山本 あ、トイレ？

みほ ねえ、就職活動は？どんな感じ？

山本 あ、うん、まあね…。

みほ まだ決まんの？

山本 いつももう少しの所までは行くんだよ。

みほ へえー、そうなんだ。

山本 ホント、もう少しの所なんだけどね。

みほ 凄じやん。

山本 だろ？どの会社受けても、ホントもう少しの所までは行くんだよ。ここはさすがに手が届かないだ

ろうなつて会社でも、ホントもう少しの所までは行くんだ。

みほ 凄じ。どの会社受けてももう少しなんて。

山本 そうなんだよ。

みほ だってもう少しの所までも行けない人も居るんだよね世の中には。なのにいつももう少しなんて。

山本 だろ？

みほ 凄いなあ。

山本 ねえねえ、こっち来てよ。

みほ (戻ってきて) でいい決まるの？

山本 …まあさ、とりあえずこっち、こっち座つてよ。

みほ テーブルの上のノートを見て、

みほ なにこれ？

山本 あ、それダメ。

みほ なに？ (ノートを開く)

山本 それは、ここの、その…

みほ 「今日、かなさんがとうとう僕の部屋の前までやってきた。」

僕 帰つて来る。後ろからかな、ついてくる。

みほ 「まさか部屋の中までは入つて来ないだろうと思ってドアを開けると、かなさんも一緒に入つて

来ようとした。さすがにこのまま気付かない振りをするのは無理だと思って、でもかなさんはかなさんで未だに僕に見つかっていないと思つていらしいので第一声がとても難しい…」

僕 …あ、あれ？

かなこ、知らん振りをする。

僕 かなこさん、ですよ？

かなこ「…」

かなこ、去る。

みほ 「やつぱりかなこさんはこの期に及んでも僕から隠れているつもりだ。僕はもどろついたらいいの

かよくわからないけど、なんだかいたたまれない気持ちになった。」

山本 「君は本当に優しいんだな。」

みほ 「優しくないよ。僕はね、優しくない。」

山本 「だったらもう少しイヤな事はイヤだと言えるようにした方がよいよ。」

みほ (読み終えて) ふーん…。

帰宅した僕は、部屋に居る山本とみほに会う。

僕 …あのお？

山本 (振り返り) あ、もうこんな時間だ。

みほ …誰？

山本 ううん、もう行かなくちゃ。

みほ え？

山本 いいから行こう。お邪魔しましたー。

みほ お邪魔しましたっていう事？

みほ、立ち上がる。がすぐに座り、ノートに目を落とす。

僕 そういうと、彼らは逃げるように出て行ったんだ。

星野 会えたんだ、良かった。

僕 このノート、山本君も書くんだよね？

星野 そりゃそうだよ。彼は劇作家だからね、きつととんでもないこと書くよ。

僕 あのさあ…

星野 なんだい？

僕 じゃあ言うよ、

星野 何を？

僕 イヤな事はイヤだと、言ってみるよ。

星野 お、いいぞ。その調子だ。

僕 山本君さ、知らない人あげないで欲しいんだ…、まあ、星野君もなんだけどさ、ここは結局、僕の部

屋なんだからさ…、

星野 そうか、彼女を連れて来ていたのか。それは確かにそうだね。

僕 あとさ、僕の前の時間 山本君じゃなくて、星野君が良いなあ。

星野 どうして？

僕 だって、彼の後は部屋が散らかってるんだもの。山本君が散らかした部屋を星野君が掃除して、きれいな部屋になった部屋を僕が使いたい。

星野 ……いいかい鬼頭君、それは言い過ぎだ。わがままとは違うんだよ。

僕 ごめんなさい。

星野 いやいいよ。じゃあそうしてみようか。山本君、この話どう思う？

山本 ……

星野 山本君？

山本 ……

僕 ねえ、彼がこのノートを開くの待ってるよ、いつになるかわからないから星野君、どうか直接言ってくれないかい？

星野 そうか、そうなら僕は山本君が帰ってくるのを待ってなきゃならない。

僕 すぐ出ないとマジイのかい？

星野 いや、そうじゃないんだが顔を合わせると、途端共同生活している事を思い出しちゃうんだ。こうして一人で居る時は、一人暮らししているから。

僕 それは美に共感出来る。じゃあどうしよう？

星野 でもここは僕が連れて来た責任もあるから、明日だけ待ってみるとしよう。

僕 ありがとう。

「ピンポン。」

僕 ……

「ピンポン。」「ピンポン。」「ピンポン。」「ピンポン。」「ピンポン。」

僕は恐る恐るドアのそばまで行く。

女の声 隣の岩永です。

僕 あ、はい？

岩永 酔の瓶を持って立っている。

岩永 お酔を借りたんです。昼間

僕 あ、酔？

岩永 ありがとうございます。

岩永 去っていく。

僕 酔も貸したのかい？

星野 え、貸してないよ。

星野 山本に話し掛ける。

星野 やあ、久しぶり。

みほ ノートを開じる。

山本 あ、お久しぶりです。あれ？まだ居たんですか？

星野 うん…、実はね、君に話があつてね。

山本 あ、はい。

星野 あ、初めまして。

みほ どうも…。

星野 すいませんね、いきなり。

みほ あ、いえ…。

星野 どうぞ書いてる…。

山本 あ、はい。ぼちぼち。

星野 そう。

山本 ……で？

星野 あ、ノート、読んでくれるかい？

山本 ノート？

星野、新しいノートをテーブルの上に置き。

星野 ここに、置いておくから。

山本 はあ…。

星野 じゃあ…。

山本 なんだろう…？

山本、ノートを開く。

星野 山本君、あのね、時間帯をね、ちよつとずらして貰えないかなと思つて…。

山本 え？

かなこ、鼻歌を歌いながらスキップをして、買い物袋を提げてやつてきた。

ドアの前でみほが居る事に気づき、買い物袋を落として、去る。

みほ …ねえ、誰か来たみたいんだけど。

僕 でも、返しに来たんだけど…。

星野 貸してないんだけどなあ…。それでね山本君、今ほら、山本君は、夜の七時から九時じゃないですか、

山本 はい。

かなこがスキップで買い物袋を提げてやつてきてドアの前でみほを見て袋を落として去る。

みほ また誰か来たんだけど。

僕 今度こそ、台所に置いておくから。しっかり、置いておくから。

僕 キッチンに酢を置き、出掛ける。

星野 そんなだつて、今時調味料借りに来るかい？山本君、それを、僕の前にならないかな？

かなこスキップ買い物袋捨てドア前袋落とし去る。

みほ これ(買い物袋を二つ持ち上げて) どうしよう？

山本 え？…なにソレ？

みほ (袋の中を覗いて) 枝豆。

山本 気持ち悪いからそのままにしておこう。

みほ うん…。

僕 良いんだけどね、僕は好きなんだけどね、そういう古き良き日本。

星野 まあ、そうなんだけどね。ねえ、山本君。

山本 …。

星野 山本君？

山本 …。

星野 山本君…？ねえ、彼女さんといちゃついている？ねえ、いちゃつかないで、ノート読んで。

山本 …。

僕 星野君…。

星野 彼女さんへ、このお部屋は、僕と山本君と、もう一人の男の三人で住んでるんです。まあ住んでるって言うか、時間帯で区切つて、それで、僕の後の時間が山本君の二時間で、その後、もう一人の男の

時間なんです。

山本 すいません、はい。なんでした？

かなこ、やつてきて、部屋を見回す。

星野 あ、山本君だ。うん、それでね、それを、ねえ山本君、僕の前にならないかな？

山本 すいません、なんの話でしたっけ？

星野 …だからノート読んで貰える？さかのぼつて。全部書いてあるから。

山本 …。

僕、帰つて来て、部屋の中になかなこが居るのに驚く、が見て見ぬふりをしてノートを開く。

星野 山本君、どうかな？

山本 …。

星野 山本君？

山本 …。

僕 星野君、やつぱりダメだよ山本君。全然ノート見ないもの。

星野 そっだねえ、こういう時に、離れていても、話が出る便利な物があるといいのだけれど…。

僕 それは電話だね。

星野 電話、あれ、高いんだ。

山本 前って、え、何時ですか？

星野 あ、山本君！もうちゃんと毎日ノート開いて。待ってたんだよ君の文字を。うんとだから、朝

山本 朝？

星野 うん…。

山本 え、朝の？

星野 だから、七時から…

山本 え、え、なんで朝七時にわざわざここに来なきゃいけないんですか？

星野 それはだから、仕事しに…

山本 いやいや、仕事する時間くらい自分で選はせて下さいよ。

星野 うん、まあ、そっだよな。

山本 僕朝はちよつと、寝たいんですよ。夜型なんです。

星野 うん、それはまあ、うん、みんな、うん…

僕 ここホント便利。職場まで近いし、駅も目の前だし。

星野 そっだね。

僕 帰るのめんどくさいなあ。

星野 え？！

僕 明日朝早いんだよね、ここなら楽。

星野 いや、それはうん！とても良いことだけれど…、それは無理なんだよ、次の人来るし。

僕 あの猿みたいなの？

星野 うん。

僕 星野君！星野君、がんばって！  
星野 ねえ彼女さん、ちよつとごめん、今はとりあえず山本君と話をさせて下さい。…別の所に、泊まら

ない？

僕 え？

山本、みほにキスをしようと近づく

僕 そんな余裕あるの？

星野 山本君！

僕 ここは僕の部屋なんですよ！

かなこがキッチンの影から見ている。

みほ 誰か居る…？

山本 …え？

かなこ、隠れる。

星野 山本君！山本君はさ、じゃあ何時が希望なのかな？

山本 そりゃあ今の時間が一番良いんですよ。

星野 でもそれだと、僕の後で、鬼頭君の前になっちゃうから、

山本 え、何が問題なんですか？

星野 うん、だからノート読んでは？さかのぼって。

山本 だってこれ交換日記じゃないですか、なんだか恥ずかしくて。

みほ 今日はかなこさん、会社の前に居なかつた。もう彼女は僕の前には現れないんだと思ってウチに帰るとかなこさん部屋に居た。…！（見直す）

山本 さすがの僕もこれはいけないと思つて、このままでは星野君達にも迷惑が掛かる。

みほ それでどうしたんだい？

山本 かなこさんはまだ隠れているようだから、僕はもう彼女を見つけてあげない事にした。

みほ …は？

山本 見つけて貰えないんじゃない、いつまでも隠れていられない。

みほ そうか、それは確かに優しくない。

山本 そっさ、僕は悪魔のような男なのだ。

みほ これ、なんの話？

山本 さあ？

星野 これは連絡帳なんです。大事な連絡することが書いてあるんです。君も書くんですよ。ちよつと彼  
女さんごめん、黙っててくれる？

みほ …黙ってますけど、読んでるだけなんで。

山本 みほって言います。


みほ 汚い字。

僕 星野君…。

星野 あのお、すいません。みほさんはこの部屋の住人じゃないんで、ノート書かないで貰えますか？


みほ   
(うんち)

星野 …あの、こういうのヤメテ、ノート汚くしないで。

みほ 

僕 星野君…。

星野 落書き帳じゃないんですよ…。

みほ 

星野 ねえ山本君！山本君書いて！ノート読んで、ちゃんと考えて！

みほ 今寝てます。

星野 起こして下さい。話をしようと伝えて下さい。

みほ …。

星野 山本君！

みほ …。

星野 山本君！

みほ …。

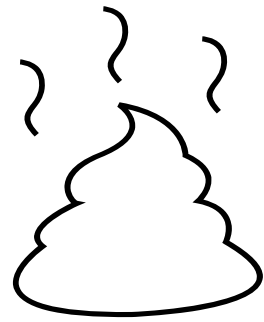
星野 彼女さん！

僕 星野君…、もう一ヶ月経っちゃった。

星野 …わかってるよ。今ノートを新しくするから、きつと気付いてくれると思うんだ。

星野、ピンクの大きめのノートをテーブルに置く。

みほ



星野 もお！せつかくキレイなノートなんだからいきなり変なのヤメテ！

みほ うるせえなあお前、なんだいちいち。

星野 …山本君は？山本君はどこですか？

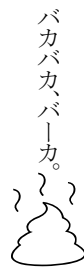
みほ ユウキは、死にました。

僕 え？！

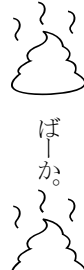
星野 ええ？！

山本 生きてます。

みほ



みほ



みほ



みほ



みほ



みほ



僕 星野君！

星野 もうホントいい加減にしてーあなたもう帰ってー二度と来ないでーなんで君が居るのかわからない

し、もうノート書かないで！

みほ あんだお前、やんのか？

僕 星野君！

星野 山本君と話がしたいって言うてるでしょー黙ってるよ女はよお！

みほ



なんで女は黙ってなきやいけねんだよ！男の方こそ黙ってるよ頭わりいんだから特にお

めえらみてえな腐れちんぼ！野郎はよお！

僕 星野君！



吉田 やつてきて、

星野 腐れちんぼ、野郎は言い過ぎじゃないかよ！

みほ 腐ってんじゃねえか、どうせ一回も使つてねんだらうがよ！

僕 星野君…！

星野 使つたことあるわちよつとくらいい！

みほ ちよつとじゃねえか捨てちまえそんなもん！

僕 ひどい！

星野 なんで捨てなきゃなんねんだよ！

みほ 引きちぎつてやるよこつち来いお前！

僕 星野くん！

星野 行つてやるわお前逃げんなよ！

みほ おう来いよ。

僕 …。

星野 …。

みほ 早く来いよ！お前いつになつたら来んだよ！

僕 星野君…。

星野 忙しいんだよ仕事がよお！

みほ おめえみてえな野郎が働いたつて社会にとつてなんの意味もねえよ辞めちまえアホが。

僕 星野君！

星野 俺だつて意味ねえ事くらいわかつてんだよ、けどしようがねえだらう、お前国民の三大義務知つてっか？

みほ 知つてるよんなもん！

僕 星野君！

星野 言つてみるよ！

みほ それがなんなんだよなんの話だ、おまえ社会の先生か！

僕 え？！

星野 俺が社会の先生な訳ねえだらう、早く言えよ！

みほ お前が社会の先生だつたら生徒ぐれるわ！

僕 え？！

星野 だから社会の先生じゃねえつて言つてんだらう！

吉田 もうホント、喧嘩は止めて下さい…。

みほ 夜中にドンキホーテ行く生徒はつかだわおめえのクラスみちや。

吉田 いいじゃないですかドンキホーテ行つたつて…。

僕 星野君！

星野 なんでドンキホーテの話になんだよ、早く答えるよ三大義務をよお！

みほ フォアグラ、トリユフ！

星野 お前それ三天珍味だらうがよお！んで後一個どうしたんだよ！

吉田 キヤビア。

みほ キヤビア。

僕 星野君！

星野 教えて貰つてんじゃねえよ！

みほ あんだこの野郎！

僕 星野君！

吉田 はいもうこの辺で、ね。

星野 お前ノート破れんだらうがよ！

みほ うるせえよおめえが先にいちゃもんつけて来たんだらうがよ！

僕 星野君！

星野 ノート！くしゃくしゃにすんじゃねえよ！

吉田 あーあーあー、僕がちゃんとアイロン掛けておきますんで。

みほ ビリビリに破いてやろうかあん？男同士で交換日記なんかやつてんじゃねえよ気持ちわりい。

僕 今日はかなさんと一緒に帰つて来た。ご飯を作つて貰つた。やきそばだけ焼きすぎで、まる

で枯れ木を食べている気分だった。

星野 それは良かったね。どんなモノでも、一人より二人の方が美味しく感じるものさ。

僕 星野くん…、僕はこんな事書いてない。

星野 君これはひどいよ。こんな事書き出したら何が本当で何が嘘かわからなくなつてしまつたから

ね！その途端メタ構造に突入していくからね。このノートには本当にあつた事しか書きちゃダメなんだから

山本 あのお、なんか時々知らない人が書いてるんですけど…他にも誰か居るんですか？

吉田 しょうがないなあもお…(ノートをバラバラめくる)

「ピンポン。」

僕 はい。

岩永 立っている。

岩永 ケチャップ、お借りしたんです…。

僕 …あ、あの、タバスコも酢も、貸してないって言うてるんですけど…？

吉田 (ノートを読んで)「夜、時々、隣の部屋から物音がする。誰かが暴れているようだ。隣の奥さんが泣いている。」

岩永 …ありがとうございます。

岩永 去る。

星野 とにかくですね、ここは相談し合って決めていこうじゃありませんか。鬼頭君の要請としては、山

本君の後に、僕を間に挟みたいという事なんですわね。

山本 僕、別に散らかしてないんですけどね。

僕 誰かケチャップ、貸しました？

星野 貸してないよ僕は。

みほ、ティッシュで鼻をかんでその辺に捨てる。

星野 …ねえ山本君、何が散らかっているかというのはそれぞれ基準がありますから、もちろん鬼頭君も神経質になっちゃいけないとは思っただけどね。

山本 ケチャップなんてどこにあるんですか？

僕 部屋には、なんか変な毛とか落ちてるし…。えっ！(台所へ)

星野 毛はね、ヤダね。

山本 毛くらい落ちたってイイじゃない、人間だもの。

みほ なんとかみつお。

僕 …本当だ、ケチャップ無い。知らない？

星野 山本君もさ、ここは自分だけの部屋じゃないという事を自覚して、小まめにコロコロをかけるとか、してくると助かるんだ。

山本 僕そこまで毛だらけじゃありませんよ。

みほ 猿じゃねんだからよお！

山本 ウキー。

みほ 猿じゃねえかよ。

吉田 猿が居るのか…？！

僕 酔も無い。知らない？

星野 …うん、そりゃあ猿じゃないことはわかってますけどね。そりゃああかさんじゃないのかい？さあどつしようか山本君？この間の話だけど、考えてくれたかな？

山本 え、何をですか？

僕 かなさんは料理してないもの。おかしいなあ、しつかり台所に置いておいたはずなのに…。

吉田 うーん、そもそも貸してない物をどうして隣の奥さんは返しに来るんだろう？

星野 だから、朝七時から九時までに移動するか、小まめに掃除するか、どちらがいいかな？それは確かにならね。山本君達知らないよね？

山本 お酔ですか？

みほ オス、おら悟空。

山本 見てないですね。でもそれって、どうして僕だけ妥協しなきゃいけないんですか？

僕 おかしいなあ、部屋に誰かが入ってくる隙はもう無いはずなのに…。

星野 本当の泥棒だと言っのかい？そりゃあもちろん僕だって頑張るんだよ。鬼頭君だってね、頑張るよね？

みほ 本当の泥棒って何よ？

僕 皆さん、戸締まりは確実にお願いします！出掛けてすぐ次の人が来るからと鍵を閉めないで出掛けるのはやめてください。くれぐれも！

星野 さあ、僕は鬼頭君に丸一日無視されたけど、山本君、僕の前ならどんだけ毛を落として貰っても構わないんだ、全部掃除するよ。

みほ こちとら猿じゃねえんだからよお！

山本 ウキー。

みほ 猿じゃねえか。

吉田 猿が居るのか！？

みほ 好きな食べ物なに？

山本 そは。

みほ ざるじゃねえか！

吉田 …猿が居る訳ないか。ていうか猿がノート書くはずないんだ。

僕 …ごめんよ星野君、うん、僕も頑張るよ。

星野 僕だってね、そりゃあ朝七時には帰ってきたんですけどよホントは。でも君が、朝七時から二時間使

うってなったら朝九時までにはどこかで時間を潰さなきゃならない、すぐに寝たいのを我慢するんです。

山本 でも夜九時までには居られるんだから時間的には変わらないじゃないですか。

吉田 もしかしたらですよ、誰かが嘘を書いているんじゃないですかね？隣の奥さんなんて居ない、なんて

いうオチとか。

僕 僕が嘘を書いていると言っていますか？

吉田 …え？！

星野 まあ合計時間はね、そうなんだけどね…

みほ 来週から遅番になっちゃった…。

山本 あ、そうなの？何時？

みほ 一時過ぎかなあ？

山本 じゃあごうしましょうよ、朝の時間に変わりますから。その代わり三時から九時まで使わせて下さ

い。

星野 …は？三時？夜中の？え、三時？…

山本 はい。

星野 …え、こんな事言ってるけどどうしよう鬼頭君、頑張れるかい？

僕 そんなの無理に決まってるじゃない。だってそうすると僕は夜中の三時に家を追い出されるんでし

よ。僕どこに行けばいいの？僕の仕事は市場じゃないんだ。

星野 そっだよね…。山本君、それはいくら何でも無理なんだ。鬼頭君は夜九時に帰って来るんだから、

三時に家を空けるとなるし睡眠時間がコレ六時間になっちゃいます。

山本 充分じゃないですか。

星野 充分だよね…。鬼頭君どう？やれる？

僕 うんとね、それだと、帰って来て、服も脱がずに気絶するように倒れて眠って、起きたらすぐ出掛け

なくちゃならない。そのび太だもの。

星野 のび太に似てるんですよ、鬼頭君は。

吉田 鬼頭さんは、のび太に似ている、のか。

みほ、吉田の読んでいるノートにのび太の絵を描いた。

山本 下手だなあ。

星野 またそうやって絵描く？…

吉田 こんな感じか？（絵を描いた）

山本 上手い！上手すぎる！

僕 ねえ、のび太に似てるのか関係なくない？だって僕は野比のび太じゃないんだ…。

星野 そっだよ。鬼頭君は野比のび太じゃないんだからさ、ダメだよからかったりしちゃ

みほ …（のび太の絵を描く）。

星野 もお…。

山本 また下手のび太…。

みほ …（のび太の絵を描く）。

山本 あれ？のび太、お腹空いてる…。

星野 ねえ、彼女さん、落書き止めて。

みほ …（ドラえもんの絵を描く）。

山本 ん？ドラえもんの頭に、フォークを…？

みほ グサ（絵を描く）。

山本 え？！

みほ …（ドラえもんの絵を描く）。

山本 それを、持ち上げて…？

みほ …（ドラえもんの絵を描く）。

山本 だんだんに…？

みほ …（ドラえもんの絵を描く）。

山本 さらに上に…？

みほ …（ドラえもんの絵を描く）。

山本 のび太の口元近くまでやってきて？

みほ カリツ（絵を描く）。

山本 ドラえもん！

吉田 のび太満腹（絵を描く）。

山本 上手い！また上手のび太出現！

星野 コレ！もうパパラ漫画止めて！凄いページ使っちゃうから。ノートもタダじゃないんだよ。そう

だ、ノートのお金もみんなを割りましようよ。これ僕買って来たんだからね、今度は山本君達

吉田、ノートを閉じた。

台所へ行き、水を飲む。

トイレに行き、

戻って来て、

ノートを開いた。

星野 買って来て。君達が、特に彼女さんが一番使ってるんだからさ。じゃあもうこうしようよ、一ペー

シ幾らという計算にしようよ。

みほ 細かいわ！

星野 だってそうしないと無駄使いするんだよ、君は。山本君だってさ、夜中の三時にここに来て何する

つもりなの？

山本 寝るに決まってるじゃないですか。他に何するんですか？

みほ のび太としずかちゃん（絵を描く）。

僕 ここはそういう部屋じゃないんだ！

星野 ねえよく考えて、夜中の三時にここに来て、朝九時には出て行かないかなきゃならないんだよ。

山本 充分じゃないですか。

みほ のび太とジャイ子（絵を描く）。

僕 ここはそういう部屋じゃない！

星野 電卓も動いてないしさ、どうやって来るの？わざわざ夜中の三時に来なくても良くない？

吉田 あ、のびすけを描いてしまった…。

山本 のび太の息子だ！というかコレ誰が描いてるの？

星野 弱ったなあ…、どうしたら効率良く回るんだろう。

みほ 何見とんだて。

星野 …え？なんにも見てないんですけど、ていうか見える訳ないんですけど。

みほ 見とつたがや思っきり。

星野 え？

みほ 見とつたがや！

星野 （舌打ち）。

みほ なんだお前。

星野 は？

みほ あん？

星野 はあ？

みほ なんだ？

星野 あん？

吉田 凄い、このび太のやりとりだけで一ヶ月弱掛かって…。

かな、洗濯をしたり掃除をしたりしている。

「ピンポン。」

吉田 隣の奥さん、ですね。

僕 はーい…。

岩永 立っついて、

岩永 甜麴醬（てんめんじやん）をお借りしたんですけど。

僕 てん…ええ？

岩永 …ありがとうございました。

僕 …誰か、貸した？テンメンジャン…。誰ですか？テンメンジャンを貸したのは。

吉田 タバスコ、酢、ケチャップ、テンメンジャン…。

僕 隣の奥さんが泣いている…。誰かが、暴れている。

吉田 そうか、そういう事だったのか…！あのお、鬼頭さんはこの時、隣の奥さんを引き留めるべきでし

たよ。

僕 え？

吉田 この調味料の頭文字、見て下さい。

山本 あのすいません、この人誰ですか？

僕 ……あ！

星野 あ！

吉田 奥さんはサインを送っていたんですね。

僕 ……どうしたらいいですか？

吉田 それは僕に聞かれても…、僕は今、過去を変えてしまった事になるのかな…。

僕 どうしよう星野君、助けに行った方がいいのかなあ？

星野 助けるって、どうやって？

山本 ねえこの人誰？

みほ 新しい人じゃない？

山本 え、いつから居たんだったけ？

吉田、ノートを「バン」と閉じて、立ち上がる。

吉田 僕はこの部屋の住人です。押入れを掃除していたらノートがたくさん出て来まして、中身はほとんどどうでも良いことばかりで読んでいるこっちもどうかしているとは思いますが、それよりも何よりも僕が驚いているのは…皆さんどうして僕の書いた事に返事してるんですか？

セミの鳴き声。

かなこ、洗濯物を干している。

僕 星野君、最近ちっとも洗濯してくれないんだね…。部屋も山本君と同じくらい散らかってるしよ。

と云って、洗濯かごをかなこに渡す。

星野 だって鬼頭君、山本君たらひどいんだよ、夜中の三時から昼の十二時まで貸して欲しいって言うんだ、結局朝九時に起きられないからって。そんなの始めから判ってた事じゃないか、あの子バカだと思っよ。

山本 時間を代われと言うから妥協したんですよ。僕は夜の七時九時が良かったのに。じゃあいいんですよ。

よ、出て行きますから。

星野 こういう事言うんだもん、山本君とき、ヒトの足元見るの得意だよ。

みほ あつつい、この時期が一番暑いわ。

みほ、エアコンのスイッチを入れる。

星野 なんで僕の方に被害が飛んでくるのかわからない。ねえ鬼頭君、元はと言えば君が言い出したわがままでこんな事になったんだから、なんとかしてくれないか。

僕 僕だって朝三時に家を出なくちゃいけないんだ。眠いんだ。君はまだいいじゃないか、昼の十二時から夜の九時まで居られるんだから。僕なんか夜の九時から朝二時だぜ。山本君は朝二時から昼の十二時ねえ知ってる？三人の中で僕が一番持ち時間少ないんだ、僕の部屋なのに…。

星野 ダメだ。なんだか内容がちつとも入って来ない。じゃあこうしよう。時間帯を元に戻そうじゃないか。

僕 それが出来るなら僕もそれがいいと思う。

星野 山本君、そうしよう。これでみんなの希望の時間帯になるよ。

山本 ……

星野 うん、こうやって都合の悪い時にはノート開かなくなるのやめようみんな。出来るだけみんなで話合って涼しいなあ…。

僕 だから彼には直接言った方がいいんだってばよ。彼を連れて来たのは星野君なんだからさ、ちゃんと責任持って指導してくれないと涼しいなあ…、エアコン。

しばしの間。

僕 (スイッチを切って) ねえ誰？エアコン取り付けたの？！

星野 彼女さんだよきつと。

僕 彼女さん！こは僕の部屋なんです！なんで勝手にこういう事するんですか！

星野 そうですよ、こんなつけたらもの凄いい電気代だよ。僕知らないからね。使った人が払ってよね。僕はつけてませんからね！付いたら正直にその時間を書く！これを徹底して下さい！

星野 エアコンのスイッチを押す。

僕 涼しいなあ…。

星野 消すと暑いんだよ。

僕 だからダメなんだってば、星野君出る時切ってつてよ、涼しいじゃん！

星野 ごめんよ。切れないんだ、僕には、どうしても、あのスイッチを。

僕 そんなの、僕だって一緒さ…。僕だって、辛いんだからね、スイッチ切るの…。

吉田 僕の書いた事に返事が来ると言う事は、僕は今、過去と繋がっている…。

山本 時間を元に戻すんですか？

星野 あ、山本君だ。君ちゃんとノート見てよね、君の話で持ちきりなんだからさ。

山本 でも鬼頭さんは、僕のすぐ後はイヤなんですよ？いいんですか？

僕 もういいよ。

星野 もういいんだって、つてそれじゃあホントにただのわがままだったのかい？

僕 だって今は、(かな)を見て) なんだか知らないうちに部屋がきれいに掃除されていくからさ。

星野 何？ロボットでも買ったの？

僕 そうじゃないけど、なんだかもう大丈夫になった。

星野 そんなの急に方針変えないでよ、だから山本君が調子に乗っちゃうんじゃないか。

山本 じゃあいいですよ、時間戻しましょう。その代わり昼の十二時から夜の九時まで貸して下さい。

星野 コラコラコラ、何がその代わりなんだ。

僕 いいよそれで。

星野 良い訳ないでしょうが！それ僕の時間帯だからさ。山本君さ、君はそもそも会社に勤めている訳じゃないんだから別にいいじゃないか何時だって。そうやっていつでもバカな本ばっか書いてればいいんだよ君みたいなもんは。ていうか君、こんなに借りる時間増えて家賃払えるのかい？

みほ 私が借りてるんです。

山本 そうなんです。

僕 え？！

星野 え、そうなの…？

僕 星野君、又貸しの又貸しは、法律的にどうなの？

星野 ダメに決まってるよ。

僕 ダメなんですよ。

みほ あなたが最初に又貸ししたんですよ。

僕 星野君…。

みほ 私が七時間借りて、ユウキが二時間、合計で月々一六八七五円。

星野 ダメ！もう定員オーバーなんです、ダメです。

みほ じゃあ判りました、出て行きます。エアコン外して。

僕 星野君！

星野 貴様、だからエアコンを付けたのか…！

僕 やられた…。

吉田 人は一度甘い蜜を吸うと、抜け出すのが難しいと言いますからね。

みほ 鬼頭さん、困るんですよ、ちゃんと三時には出て貰わないと。これからはね、一分一秒でも延長したらその一時間分払って頂きますからね。

星野 なんて君が仕切るんだよ！ここは僕と鬼頭君の部屋だったんだからね！

僕 違う、僕の部屋だ！

僕と山本、立ち上がる。

山本 あ…。

僕 …あ、久しぶり。

山本 …あ、なんか、すいません、ノート、いつも…。

僕 あ、ううん…。あ、もっそんな時間…あ、ちよと待って、今起きたところだから。

山本 ああ…、いや、イイですよ、別に。なんか、みほがなんか、ええ。

僕 ああ、ううん。でもほら、延長料金発生しちゃうから。

山本 大丈夫ですよ、みほには内緒にしておきます。

僕 山本君…。

山本 僕はまた妻家があるからいいですけど、あれですよ、大変ですよ、自分の力で生きていくって

いうのは

僕 うん、まあね…。

山本 …だからいいですよ、ゆっくりして頂いて。

僕 山本君、君って奴は…

みほ 延長したんですか？一八七五円払って下さい。

僕 内緒にしてくれるって言ったじゃないか！

みほ 一八七五円。

僕 なんて一日延長しただけで一月分私わなきやならないんですか！

山本 僕、みほには嘘付かないと決めているんです。

僕 それで他人には平気で嘘をつくのかい、最低だな君は。

山本 みほにだけ最高であればそれでいいんです。

みほ 気持ち悪いんだよお前

山本 …え？

みほ あんたも早く帰りなさいよ。

山本 …え？

みほ 今私の時間なんだから。

山本 …え？

みほ 延長料金取るよ。

山本 …え？

吉田 これはひどい、この彼女さんが一番金に汚い。

みほ そいであなたは？

吉田 …。

みほ あなた。

吉田 …え、僕ですか？

みほ いつこに來てるの？

吉田 あれ…う僕書いてないのに…

みほ あなたちゃんと來た時間を書かないとダメでしょ。そもそもどうやって入って來てるの？

吉田 いや、えーつとですね、

みほ いいから早く來た時間書いて。家賃は一分一秒から徴収しますので、一分月々三二・二五円、一秒

だど…

星野 彼女さん、そんな人相手にしちゃダメですよ。

みほ え？

山本 何がですか？

吉田 僕がですか？

星野 君だろ？猿の居はもうやめ給え。

山本 ウツキ！

みほ うるせえんだよバカ。

山本 …。

星野 これは連絡帳なんです。君の劇作ノートじゃない。ダメですよ、居ない人を書いちゃ。

吉田 …え、僕は、山本さんが書いた人物だと言っんですか？

みほ それ本なの？

山本 そんな事して僕に何の得があるって言うんですか？

星野 あるじゃないか、架空の人物を作っておけば、その自分の持ち時間を増やせるじゃないか。

僕 …なんだって！？

星野 君はそのうち、この人物をここに住まわせる気だろう。二人居るようにみせかけその実態は君一人

果ては人数を増やしこの部屋を乗っ取るうという魂胆だな。

僕 山本君！

吉田 ちよつと待つて下さい、僕は、僕ですから。

星野 いい加減にしろ山本、白状したまえ。

僕 山本！

山本 …さすがは星野さん、僕の負けです。

吉田 え、違っじゃないですか、なんでそんな事言っんですか？

僕 山本、貴様また言うか！

吉田 山本さん！

僕 お前が山本だろうがバカ！

山本 星野さんの言う通り僕はもう一人の自分を無意識に作っていた。本当の僕は人と話すが苦手で根

暗で知らない人にもホイホイついていくなんてそんなキャラじゃないんです。ましてや猿の真似なんか

絶対しないしインターネットもした事ない。

吉田 …星野さんが言ってるのはそういう事じゃないと思いますよ。

山本 僕の家は貧乏です。兄弟が六人居て僕は一番末っ子。テレビも好きな見られない。父と母を加え

た八人家族の我が家はこよりもちよつとだけ広いオンボロ長屋に住んでいます。もう一人の僕はかっ

こつただけの金と女にしか興味の無い最低な男で台本なんて書いた事無いし普通の作家よりも偉

いんじゃないかと思って劇作家つて名乗つてたけどそれも大きな勘違いでした。

僕 山本、今夜待つてろ、ぶち殴つてやる。

星野 鬼頭君、彼は罪を認めているんだ。

僕 クソ…、ぶち殴ってやれたのに。

山本 …どうしてわかつたんですか？

星野 臭いだよ。

山本 臭い？

星野 君の書いたページを聞くとなんか変な臭いがするんだ。この人物の時にも同じ臭いがしたのさ。

僕 なんの臭いなんだ！

山本 …臭い。そうか臭いか。

吉田、自分の臭いを嗅いでみる。

星野 君もうベッドに入らないで、君が来てからだよ、変な臭いするなと思つたら。

僕 なんの臭いなんだ！

みほ あなた…、そんなにまでして自分の時間が欲しかったの？

山本 そっさ。だつて僕の時間は二四時間のうちたつた二時間しかない。ここに居るのは四人だから単純に割れば六時間なのだ。僕はこの不公平に絶えられなかった。

僕 それは僕の台詞だ、ここは僕の部屋なんだぞ！

山本 山本は立ち上がる。

星野 待て、早まるな。

山本 うるさい！…もう僕はこの部屋には居られない。みほ、幸せにおなり。

みほ はい。

山本 …「はい」つてなんだ。

みほ はあ？

山本 …まあいい。僕は先に行く、こんな働けどだけの世の中なんてまっぴらだ。疲れたよ、ゆっくり休ませて貰う。

みほ 山本は部屋から飛び降りた。

吉田 山本さん？！

星野 山本ー！

僕 …山本。

吉田 …道理で、家賃が安い訳だ…。

みほ、ティッシュで鼻をかむ。

星野 …彼女さん、どうしますか？まだここに居ますか？

みほ はい。

ティッシュを丸めて捨てた。

星野 …そうですか。

みほ じゃあ私が、ユウキの空いた二時間を借りますね。

星野 …え、ちよつと待つて。僕もその時間が欲しいんだ。そしたら朝一〇時に帰つて来れるから。

吉田 皆さん、正気ですか？人が一人死んだんですよ…。

みほ じゃあどうやって決めます？

星野 鬼頭君どう思う？というか鬼頭君借りる？

僕 え、何時？

星野 朝一〇時から十二時。

僕 そんな時間要らないよ。なんで夜九時に帰つてきて朝三時に出掛ける僕が、朝一〇時に帰つてきてすぐ十二時に出掛けなくちゃならないの？という生活スタイルなの。

星野 じゃあどうしよう？

みほ 私、一時間 千円払いますよ。

星野 …え？

みほ 二時間で四千元。このデイズニーに入れますね。

星野 いや、ちよつと待つて…、鬼頭君、どうする？

僕 なにが？

星野 値を上げるなんて、そんなの有るか？

僕 どつちでもいいよ、僕は朝の一〇時十二時に興味は無いから。

星野 鬼頭ちゃん…。

みほ じゃあ決まりですね。

みほ、デイズニーにお金を入れた。



吉田 信じられない…。皆さん目を覚まして下さい、部屋はここだけじゃないんですよ。世界はもっと広いんですよ。

みほ うるせえなあお前、ちよつと黙ってるよ。

星野 山本君、もう帰ってイイよ。

吉田 まだ言うんですか？！僕は山本さんじゃありません、山本さんは、死んだんですよ！

みほ 今この部屋を借りているのは私達三人。単純計算で一人八時間。そのうち私は九時間持っています。

これで星野さん、あなたに並びました。

星野 ……いいよ、そういう事ならいいよやってやるよ。ここからはサバイバルだ。

吉田 ……これはいけない。価格競争に乗ったら大変な事になりますよ。

僕 どうして僕だけ六時間なの…？

星野 鬼頭君僕は今までなんの為に働いていたのかわからなかったがようやく見つけたよ、働く意味を。

僕 え？

星野 全ての時間を買い占めて、君達を追い出してやる。

僕 ……ほ、星野君？

みほ ……おう、やってみるよ。

星野 ……やってやるよ。まず君を一番に追い出してやるからね。

僕 ねえ星野君、ここ僕の部屋…。

みほ 返り討ちにしてやるよ、来いよ。

吉田 喧嘩しちゃダメです。また時間があつという間に経っちゃいますから、ね。

星野 君はすぐそうやって暴力を振りかざすんだからやめてよね、財力で勝負なんだからね。

僕 ねえねえ星野君、ここ僕の部屋だよ…。

みほ お前の時間全部買い占めてやるからね。

星野 一つだけ教えておいてやる、今この部屋に居るのは三人じゃない、五人だ。

僕 ……は？

みほ は？

吉田 え？

岩永 やつてくる。

岩永 お邪魔します。

吉田 ……隣の奥さんだ。

岩永 すいません、お言葉に甘えさせて頂きます。

吉田 ノートをめくる。

僕、それを覗きこみ、

僕 ……あ

星野 十二時帰宅。さっき隣の奥さんに会ったよ。ちょうど廊下ですれ違ってね、手にコシヨウを持って

いたからこれはもしかしてと思ったんだ。タバスコ、酢、ケチャップ、テンメンジャン、コシヨウと来たから次はきつと「ろ」だ、だから僕は思わず話を聞いてしまったんだ。

みほ 『ろ』で始まる、調味料ってなんですか？

星野 『ローヤルゼリー』に決まってるじゃないですか。

みほ それ調味料ですか？

星野 ろ…ろ…ろ…。

岩永 夜九時から十一時まで、月々二時間二七五〇円でしたよね。

僕 ……ああ、えつと…、ああ。

岩永 この部屋は、人が何人も出入りしているのに一切話し声も聞こえない。おかしいなあとは思っていません。

僕 ああ、ああ、ええ…。

岩永 あ、迷惑なら、帰ります、けど…？

僕 あ、いや…、あ、はい、はい聞いてます…。

岩永 すいません。前はたまにだつたんですけど…うるさいですよ、すいません。

僕 あ、じゃあ僕は、そうか、はい、じゃあ、すいません、すぐ出ますんで。

岩永 ……はい。

僕 あ、なんか、聞いてます？

岩永 ……？

僕 えつとここに、連絡ノートがあるので、その日あつた事とか、気付いた事などを書いておいて下さい。

岩永 あ、連絡ノート…？

僕 日記帳みたいに思えるかもしれませんが、連絡ノートなんで、ちゃんと目を通して頂くと、大事な情報が隠れてたりしますんで、わかると思います。

岩永 情報が隠れてる？

僕 あ、いや、すいません隠れてないです。普通に、読んで頂ければ、ええ。

岩永 わかりました…。

僕 えつとお、家賃と光熱費は、このデイズニーに入れて下さい。

岩永 あ、デイズニー、はい。

僕 戸締まり、ちゃんとして下さい、…泥棒が入って来ますんで。

岩永 泥棒？

僕 じゃあ、こゆつくり…。

岩永 はい。

僕 (どこことなく声を掛ける) はい、じゃあ行きますよお。

僕、出て行く。かなこもついて行く。

隣の部屋から物を壊す音。

星野 ろ、ろ、ろ…

僕 星野君…、星野君ってばさ、コレどういう事？

星野 君が隣の奥さんを助けなきゃ、みたいな事を言うから、だから僕は、どうしたらいいかを考えてた

ね、…うん。あ、ローズヒップ、これならいいんじゃないか。

僕 ねえ判つてる？僕、朝の三時に家を出なきゃいけないんだよ…。

星野 判つてるよ。でも不定期だつて言っただ、奥さん。

僕 全然規則正しいよ、毎日だよ、毎日夜九時から二時間。

星野 それは大変だ、

僕 そうだよ。

星野 奥さん。

僕 ああ、うん、まあ、奥さんはそりゃあ大変だけどね、

星野 可哀想に。

僕 ねえ誰か僕の心配はしてくれないのかい？僕は一体何時に寝たらいいの？

星野 好きな時に寝たらいいじゃないか。

僕 好きな時に寝られないから言っただい。

星野 でもね鬼頭君、これは人助けなんだ。

僕 ……うん。

星野 奥さんの為なんだ。

僕 ……うん、そうだね。

星野 どうかな？そんな時間に外に居るなら、コンビニでバイトでも始めたら？

僕 なるほど、それは良いアイデアかもしれない。けど確実に身体壊すよ僕。

星野 そうなのかい。

僕 ……どうしてなんだろう、この方法ならもう少し楽になると思ったのになら変わりが無い。

僕、振り返るとかなこが見ている。

僕 ……そしてかなこさんはまだ僕から隠れているつもりなのだろうか。

僕、腰を下ろしかなこを横目で見る。

かなこは立つたまま、空を見上げる。

僕 ……もう思いっきり居るんだもん、ここに。これでも隠れているというなら僕はやっぱりどうしたらいいのかわからない。これは相当な精神力だ。見習わないといけない…。

僕、空を見上げる。

雨が降ってきた。

僕 かなこさんと外に居ると、必ず雨が降ってくる…。

岩永 これ、私も書いて良いんですか？

みほ あ、どうぞ。

岩永 夫は、普段はとてもイイ人なんです。お酒さえ飲まなければ、本当に。今年に入って、会社で、少  
しだけ出世して、少しだけ裕福になったら、少しだけお酒を飲むようになりまして。帰日も遅くなるよ  
うになりました。たしなめると暴力を振るうようになりました。物を壊して、暴れるようになりまして。

そのうち疲れて眠ってしまつて、次の日には泣いて謝ります。その繰り返しです。

みほ それはもう別れた方が良いでしょうね。

岩永 お酒さえ飲まなければイイ人なんです。お酒が無くなればイイんです。

みほ お酒は無くなりませんし、そうやって甘やかすのもダメです。

岩永 夫は働いて、働いて、疲れているんです。働いて、働いて、疲れて、お酒を飲んで、働いて、身体を壊して、死ぬんです。だから少しくらい甘やかしても良いと思っんです。

みほ …ではしばらく実家に帰ったらどうですか？

岩永 実家は、もうありませんから。

星野 まあこういうのはね、周りがやいのやいの言ってもしょうがないんですわ。結局本人が気付くしかないんですな。

みほ なんか星野さん荒れてますね。

星野 荒れますよそりゃあ、眠たいんだから毎日。疲れて帰って来たらこんな重い内容のノート読んで。

そら酒も飲みたくなるわ。

岩永 すいません、私やつぱり出て行きましょうか。

星野 あ、奥さんのせいじゃないです。

みほ 今のはひどいですよ。

星野 すいません。

山本 山本、いつの間にか戻ってきていて

山本 これはひどいですね。

みほ ナイーブな状況なんですから。

山本 ナイーブですよ。

星野 なんだ君達は、シャンプーか。揃いも揃ってバカ。僕はもう寝ますからね。

吉田 はっ、山本さんが戻ってきている…！

星野 明日もまたたくさん働かなくちゃならない。おやすみ。

岩永 皆さん、大変なんです…！

みほ 大変なんですよ。

吉田 死んだと思っただじゃないですか…！

山本 あなたただけです、僕の事を心配してくれるのは…！

吉田 どこ行ってたんですか？

山本 ちよつと旅に、ね。

吉田 あ、そうなんですか。

山本 まんが王国、という国に、ね。

吉田 …そういう国があるんですね。

山本 まあね。

みほ 何を一人で喋ってるんだお前は。

山本 みほ、僕は改心した。劇作家なんていう儲からない仕事は辞めてちゃんと働く。だからもう一度や

り直してくれ。

吉田 僕は山本さんじゃありませんよ。

みほ お酒を飲むなどビシツと言いましょうか？第三者に言われると冷静になる事ありますから。

岩永 でも夫は暴れている事を反省はしているんです。

山本 みほ！

みほ 繰り返し返すという事は心から反省してる訳ではないでしょう。

岩永 はあ…！

吉田 暴力には暴力ですか？ダメですよ。

山本 また明日来るからね、外で、待ってるからね！

みほ この人は合気道をやっていました。

岩永 大丈夫でしょうか、夫は日々暴れていますから、相当強くなっているんだと思います。

吉田 どういう鍛え方なんですかそれは。

山本 あいや！でもどうして僕がそんな事？

みほ あなた何の為に合気道やってたの？

山本 身を守る為だ。

みほ 違うでしょ、守るべきモノを守る為でしょ？

山本 守るべきものを守る…？

みほ そうよ、あなたならやれる。

山本 (やあつて) あいや！見て、拳が速すぎて見えないだろ。

みほ 見えない事自体が見えないんだけど、さ、行って来なさい。

山本 あいや！ほら、見えない。

吉田 合気道ってそういうモノでした？

山本 あいや！

みほ さ、行って来なさい。

山本 あいや！

みほ さ、行って来なさい。

山本 あいや！

みほ 行きなさいよ！

山本 やー！

みほ 全滅行かねえなコイツ…。

部長と僕、歩いている。

部長 それはもう結婚だね。

僕 何を仰るんですか。僕なんて、一人で生きるのもやっとなのに、無理ですよ。

部長 結婚すれば、男は変わるよ。もっと大きくなる。

僕 僕は今、住む家もまともありません。

部長 私だって借家だよ。

僕 そういう意味ではなくて…あの部長、どちらへ。

部長 君の家じゃないか。挨拶をしないとね。

僕 いや、ちょっと待って下さい。

部長 そうかそうか、やはり私の目に狂いは無かった。君とかなさんは合うんじゃないかと思っていたんだ。こつちだね。

僕 どうしてウチを？

部長 部下の住所くらい知らんでどうするんだい。ここか。

僕 あ、じゃあ呼んで来ます。ホント狭苦しい部屋なので。

部長 せつかく来たんだ。お茶くらい出し給え。

僕 いやあ…

部長 さあさあ。

僕 はあ…。(ドアを開け) たいいま。

かなこ (台所の方から) お帰りなさい。

部長 本当だ。どれどれ？お邪魔しますよ。

僕 あ、部長さんを連れて来たんだ、覚えてるかい？お見合いの。

かなこ …。

かなこ、台所へ。

部長 …ん？どこに居るんだい？

僕 あ、今台所の方に、はい。

部長 …どうも、お久しぶりです。

かなこ …。

僕 人の気配がすると、すぐ台所の方に隠れるんです。

部長 ゴキブリみたいだね。うん、そうかいそうかい、いやあ、これは是非仲人を買って出ないとねえ、

わはははは。

部長、座る。

星野 うん、そういういきさつでここに来たのは読めば判るんだ。僕が知りたいのは、どうしてこの人は

帰らないのかって事でね。

僕 それは僕にはわからない。部長に聞いてくれないか。

星野 聞いてはいるんだよ、何度も。

部長 ここはなんですか？共同で生活しているんですか。

星野 あ、ええ…。

部長 しかも時間でねえ。なるほど面白いシステムですなあ。

星野 …今日は、お仕事は？

部長 有給を貰ってね、しばらくのんびり出来そうなんです。あははは。ストレスですなあ、それは。

岩永 そうみたいですな。

部長 スポーツはされないますか？

岩永 休みの日はほとんど寝てますから。

部長 ジョギングでも始めたなら如何ですか？奥さんも一緒に。

岩永 ジョギングですか。

部長 そうだ、私も、一緒に走りましょうか？

岩永 え？

部長 運動不足でね、いかなんあとは思っておったんです。おかえり。

僕 ……たいいま、帰りました。

部長 寒いね今日は。

僕 ……ええ。

部長 あいたたた、寒くなつてくると、関節がね、痛いんですよ。ははは。

僕 ……あれ？かなごさんは？

部長 んー？

僕 かなごさん？…かなごさん？（ベッドの下などを見るが）居ない…。

部長 （新聞を読んでいる）今年もドラゴンズ、優勝かな。こども当たり前に優勝するようになると、逆につまらないねえ。おやおや、こんな時間までお仕事ですか。

みほ ……あ、はい。

部長 何をされてるんですか？

みほ あ、スーパ一の、二四時間なんで…

部長 イオン？

みほ いや、イオンじゃないんですけど…。

部長 朝は、何時に出られるんですか？

みほ あ、昼からなんで…

部長 そうですかそうですか。

みほ 鬼頭さん、なんですかこの人。困るんですよ、勝手に知らない人をあげて貰つては。あなただけの

部屋じゃないんですから。

僕 ……すいません。でもそれは、僕がずっと言い続けてきた事でありまして。

吉田 この人、どうして帰らないんだろう…？

みほ ここはあなたの部屋であつてあなたの部屋ではない。というかもつあなたの部屋という考え方は捨てて下さい。

僕 僕の部屋なのに…わ！山本君。

山本が僕の時間帯に部屋に居る。

山本 すいません、お邪魔してます…。

僕 ……え、君何やつてるの？

部長 彼はずっと居たよ。

山本 ……僕の部屋が無いんです、みほに追い出されてしまったので…。

僕 うん…。

皆 吉田の読んでいるノートを覗きこみ、

星野 「みほ、僕ね、就職決まったよ。ネジ工場で八時間ずつとネジを見ている仕事だ。来月になれば給料が貰える。そしたら僕は君の時間を借りる。また一緒に…」

部長 そんなノートでやりとりしてないで、みんなと一緒にどこかに行つたらいいじゃないですか。

星野 ……じゃあすいません、おやすみなさい。

部長 なんだか思春期の子供みたいですね。ははは。

星野 ……（いびきをかく）。

部長 おやすみなさい。

星野 あ、おやすみなさい。

部長 寒くなつてくると、関節がね、痛いんですよ。夜の倉庫作業は、寒いでしょう？夜通しでしょ？大変ですなあ。

星野 お出かけしたらどうですか？今日天気イイですよ。

部長 紅葉もキレイに染まつて来ましたかな。

星野 ああ、そうですね、キレイですよ。

部長 紅葉を見に行こうよう、ははは。

星野 ……鬼頭君。

部長 レッツゴー！行こうよう！ははは。

星野 ……鬼頭君！

星野、頭を抱える。

岩永 「もう僕は眠くて眠くてたまらないんだ。誰かこの人を追い出して下さい。一生のお願いです。」

部長 紅葉を見に行こうよう、ははは。

僕 ……ははは。「でも良い方ですよ、部長さんは」

部長 レッツゴー！行こうよう！ははは。

みほ、部屋の隅の方で体操座りをして部長を睨んでいる。

みほ、部屋の隅の方で体操座りをして部長を睨んでいる。

みほ 「…そうなんですか？」

星野 「ジョキング、一緒に行つて下さつて。久しぶりに太陽の光を浴びたと喜んでおりました。」

岩永 夫のあんなさわやかな笑顔、久しぶりに見ました私。

部長 それは良かった。いやいや、なかなかの好青年でしたよ。

吉田 隣から、誰かが何かを壊す音が聞こえる。

部長 ん？

岩永 汗をかいたらビールが美味しいんだそうです。

部長 …。

岩永 飲んでます。

部長 しょうがない男ですなあ…(立ち上がろうとするが) あいたたた、

岩永 大丈夫ですか？

部長、包帯を足に巻きながら。

部長 いやいや、暴れるのも無理なくらいね、倒れるまで走つてやろうと思つたんですが、私の方が先に

この通りの有様です。ははは。

僕 病院行きました？

部長 いやいや、大した事ないですよ。しばらく安静にしておけばね、失礼。

部長、星野の隣で横になる。

星野 鬼頭くーん…！

僕 …一人で歩けない感じですか？

部長 そんな事もないんですがね、アキラスかなあ、まともに歩けないのですわ。

僕 はあ…。

部長 アキラス臆かなあ。

吉田 …帰らない気だ。

かな、帰ってくる。

ほつとする僕。

かなこの手にはクリスマスツリーがあり、それを部屋に飾る。

みほ 私の時間借りてもしょうがないじゃないの、昼間の仕事なんですよ？だったら夜借りなきゃ。

星野 「夜？え、何時？」

岩永 「七時から九時じゃないの。」

山本 「そんな時間に借りても君に会えないじゃないか。

僕 「何を甘い事言つてるんだ貴様。」

みほ そう簡単に会えると思つたら大間違ひなんだよ。一番遠くの時間から攻めて来い。

星野 攻めるつて言われても…。

部長 あーもう、こんな季節ですか。一年、あつという間でしたなあ。

岩永 「今、山本君は僕の時間にやつてきてノートを書いてるんですね。僕の時間には、僕を含め四人の

人間が居るんです。これどうにかならないでしょうか。」

山本 誰か僕に時間を譲つて下さい。

吉田 四人？…ああ、かなさんも居るのか。どういふ関係なんだこの二人。

僕 三畳に四人です…。かなさんは基本豆所から出てこないけど。

みほ ユウキ、まずこのおじさんをなんとかして！

山本 出てつて貰えませんか？

部長 いやあ、私もね、こんな身体じゃなかったら、すぐに出て行くんだけどねえ。ははは。アキラスか

なあ。

山本 せめてみほの時間は出てつて下さい。おじさん、家あるんですよ？

部長 ああ、あのお嬢さん？あの子は、来て、そのノートに何やら書いて、すぐ帰っちゃいますよ。

山本 …え？

みほ 「七時九時、あんた幾ら出せる？」

星野 七時から九時は僕の時間じゃないか。あげないよ。

岩永 「二時間月々幾ら出せるの？」なんか私、ここに居て大丈夫でしようか？

吉田 ちよつと、またそういう事言つて、いい加減にしないとダメですよ。

山本 まだわからないけど、給料は手取りで一〇万くらいだと思っただ…。

僕 「じゃあ一万ね。」

星野 「二時間で一万？それはちよつと…」

みほ 一時間一万だよ。

岩永 「二時間?！」

山本 それは無理だ。

僕 「七時九時はゴールデンタイムなんだからそれくらい払わなきゃ。」

みほ 「ちよつと君！値を上げたらイイってもんじゃないだろう。」

吉田 「この家賃は四五〇〇〇円ですよ。」

星野 山本君、彼女さんの近くがイイなら一時三時だよ。

岩永 「一時三時、それがイイです!」

山本 僕、一時から三時にします!」

僕 バカじゃないの?それ僕。僕の時間。

みほ 幾ら出せるの?

星野 「うーん、五〇〇〇。」

吉田 家賃は四五〇〇〇円ですよ!

岩永 「じゃあいいよ、デイズニーに入れといて。」

山本 やった!

僕 バカか。いいですか皆さん、僕は、夜十一時に帰って来て、朝二時に出るんです。四時間しか家に居ない。その上山本君が一時から使ってたなら、僕は一体何しにこの家に帰って来るんですか?

僕 その場に横になる。

かなこ、それを見て、ゆつくりとノートに書き込む。

みほ 鬼頭さん、倒れました。…(かなこを見て)あなたが書いたの?

かなこ、台所へ行き、濡れ雑巾を持って来て、僕の顔にベチャッと乗せる。というか落とす。

僕 「ふはっ!」と飛び起きて、みほを見る。

僕 ……あーあー、もうこんな時間!あー一瞬目をつぶっただけだと思っただけにちくしょー!延長料金が!

延長料金があー!

僕 走って出て行く。

かなこ おやすみなさい。

みほ …おやすみ。

かなこも出て行く。

吉田 皆さん、僕の部屋にはノートがたくさんありました。それも、あと二冊になりました。わかりますか?もうすぐ終わるんです。どついう終わり方をするのかわかりませんが、この生活にも終わりが来ます。僕は最後のページを開けば済むのですが、それはしないでお願いします。

みほ 「これは、皆さんがここに居た、という記録です。それを読んでいる人がいる。この部屋は皆さんが居なくなってもまたここに居るんです。」

みほ、出て行く。

星野 「そして僕がやってゐる。時間は、そういうものなんです。その中の限られたほんの一瞬を僕等は生きていて、それはこの手にとどめておくことは出来ない。」

星野、出て行く。

岩永 「この記録は本当にあった事なのかそうじゃないのかわかりません。誰かの創作かもしれません。この中には劇作家が居りましたが彼にはそんな才能は無いようなので違つかもしれない。」

岩永、出て行く。

山本 「この記録はそんな考えなどどうでもいいくらいどつちでもいい内容で、それを読んでしまった僕もどつちでもいい存在で、僕等はそんなどつちでもいい事で構成されている、なんとも不可解な生き物なのです。」

山本、出て行く。

部屋には吉田と部長だけ。

部長 起きてきて、トイレに行き、水を飲み、

部長 なんだか難しすぎて私にはさっぱりわかりませんが。みんな一緒に住んだらいいじゃないですか。ルームシェアってそういうものでしょ？一人で暮らすには厳しすぎる世の中を、一緒に乗り越えていきましようよ。さし当たりクリスマスを過こしたらいいじゃないかと思っんです。いかがですか、私なんかはバカですからすみません、こんな事しか言えなくて。

吉田 いや、はい、そういう事ですね。

僕 とかなこ、帰って来た。

僕 買い物袋を提げている。

部長 お帰り。

僕 ……ただいま。

僕 テーブルに袋を置いて、

僕 部長、会社辞めたんですね。

部長 あ、聞いた？

僕 ……どうするんですかこれから。

部長 いやあ、足がね、

僕 そんなにですか…？

部長 アキラスがねえ。

僕 十二月四日、十一時帰宅、一時出発。

僕、デイズニーにお金を入れようと財布を出す、小銭を数えるのが面倒臭い。

僕 あーもお、(適当にジャラジャラと入れ) 一時ちよい前に起こして下さい…(机に突っ伏する)。

部長、僕の肩をトントンと叩く。

がばっと起き上がり、

僕 はっ、もうそんな時間?!一瞬目を瞑っただけだったのに!

僕、立ち上がる。

部長 違っよ。

僕 ……?

部長 明日は、とうかあと一時間もしたら、君の誕生日だろう?

僕 ……あ、もうそんなですか?

吉田 ……十二月二十五日なんだ。クリスマスか。

僕 もついでですよ誕生日とか…、

部長 幾つになっただい?

僕 ……三十…、よくわかんないです。おやすみなさい(突っ伏す)。

部長 時間だよ。

僕 えー?今一瞬目を閉っただけなのに…、あー。

僕、フラフラと出掛けていった。

部長、大きな紙袋に包まれた何かを部屋の隅にそっと置いた。

かなこは台所からやってきて、机の上で枝豆を剥く。

部長 彼は、あれですか、こんな時間に外に行つて、何をしているんですか?

かなこ、ノートに目を向ける。

部長 (ノートをのぞき込み) カプセルホテルに、マンガ喫茶…、なるほど。「お誕生日おめでとつ」と

書き込む。

山本、やってくる。

部長 やあ、お疲れ様。



山本 お疲れ様です…。

部長 出て行く。

山本、大きな紙袋に気づいて

山本 …ん？

袋を開ける。と大きなぬいぐるみが入っている。

山本 …？（ノートを読み返す）ああ、誕生日なんだ。でもこれ…？

吉田 二時帰宅、三時出発。みほへ、今日はクリスマスです。プレゼントを置いておきます。気に入って貰えるかどうか。」

山本、自分の買ってきた小箱を見てやや考える。

吉田 「みほへ、ベッドに置いておきましたよ。机の下は部長さんから鬼頭さんへの誕生日プレゼントみたいですよ。」

ぬいぐるみをベッドに置き、自分の買ってきたプレゼントを紙袋に入れ机の下に。

山本 鬼頭さん、おめでとう。わ！（かなこに気付く）びっくりした…、え、ずっと居ました？

かなこ、黙々と枝豆を剥いている。

山本 枝豆…。もう行かないや。

山本、出て行く。外で遠くからみほを見てから去る。

吉田、部屋の隅に置いてあるクリスマスツリーを見つめる。

吉田 …ん？…ん？…！

吉田、新聞を見つけて日付を見る。

吉田 これ思ったより過去じゃない…。え？三日前？！…え？

吉田、過去のノートも開き何度も確認する。

みほ、帰ってくる。

みほ …あれ？おじさんは？

かなこ、首をかしげる。

みほ 枝豆？こんな季節に。（ノートに書く）二時帰宅。あんた誰なの？ユウキじゃないの？もしもし！

吉田 あ…、僕ですか？

みほ 僕です。

吉田 吉田さんです…。つてあの、これどうなってるんですか？僕書いてないのに、その…、

みほ ああ、誕生日なんだ…。クリスマスか。（ノートを読んで、ベッドの上のぬいぐるみを見る）相変わらず最低のセンスだな。

みほ、袋から「山本のプレゼント」を取り出し、ぬいぐるみを袋に入れる。

みほ 名前はいいんだよ。何者か聞いてんの。

吉田 あ、学生やつてまして。

みほ むかつくわあ。このなんでも判つてますみたいな言い方とか頭良いんですみたいなそいで結局あんたが住むっておい吉田、なんかあんたの勝ちみたいでむかつくわ。

吉田 僕、もうここに住んで半年なんです。大掃除しようと思つて押入れ片づけてたらノートが出て来まして、その、あ、このノート読み始めてもう二時間くらいですかね、そんなに経つてないか、その証拠にほら、僕の書き込み、皆さんのどの時間帯にもあるでしょ？そこに返事が返つてくるって言うのが不思議でたまらないんですけど、うんと、今だつてもリアルタイムで会話してますからね、今日が二八

日ですから、

みほ 吉田く、難しいんだよお前。何ごちやごちや言ってんだよ。は、大金払え。

吉田 …私ってますよ毎月、僕はデイズニーじゃなくてちゃんと…

吉田、デイズニーの缶を見つけて、

吉田 デイズニーがある!?

みほ 変なおつさんおらんで久しぶりに寝れた。十二時家を出る。誕生日おめでとう。

みほ、「山本のプレゼント」を持って出て行く。

入れ替わりに星野がやってきて、ノートを読む。

吉田 あのおすいません、僕の居る、今が二八日で、皆さんが二五日だとすると…そうすると…どう  
いう事ですか?

星野 もおね、最近今日が何日とかよくわからないんだよ。

吉田 あ、星野さん。

星野 自分の年もよくわからないんだから…。鬼頭君、幾つになつた?おめでとう。十二時帰宅。

吉田 …十二月二十五日。…明日が二六日、明後日が二七日、

星野 (袋を開けて) こんな鬼頭君要らないよ。

星野、ぬいぐるみを出し、ポケットティッシュを紙袋に入れる。

かなこ、枝豆を剥いている。

星野 枝豆だ…。こんなの食べたら鬼頭君死んじゃうんじゃない?皆さん、正月はどつとされるんですか?

星野、ぬいぐるみを持って出ていく。

岩永 やってくる。

岩永 はい、醤油とバター。

かなこ ありがとう。

岩永 ノートに書き込む。

吉田 「九時に来ました。奥さんが…」

岩永 奥さん?…ああ、奥さんじゃないか。

吉田 「醤油とバターは私からです。」

岩永 (見直し) 部長さんは?

かなこ、首をかしげる。

岩永 そう…。夫がお酒を止めると言っているので、私はもうここには来なくてもいいかもしれないの。

だから、私のこの時間、部長さんに貸してあげようかと思つてただけど、…唐ないんじやしようがな  
いわね。

吉田 「誰か私のこの時間、要りませんか?」一番高く借りてくれる人に貸します。…もつとんだシステム  
になっている。

岩永 出て行く。

僕、帰って来る。

僕 ただいま。

かなこ お帰りなさい。

僕、ノートに手を伸ばして、枝豆に気付く。

僕 …枝豆。

かなこ、井一杯の枝豆にローソクを立てる。

僕 え、誕生日の?

かなこ、ローソクを立てている。

僕 いいよ、このままで。ローソク立たない、三六本も。

かなこ、井を僕の方へ。醤油とバターも。

僕 …僕はね、本当に枝豆が好きでね。そうか、ノートを読んだのかい？この話、誰かにした気がする。

かなこ、また枝豆を剥く。

僕、枝豆にしようゆとバターを乗せて、

僕 頂きます。

吉田 「今日、かなこさんが誕生日に枝豆を剥いてくれた。死ぬ前に食べようと思つてたけど、僕はまだ死なない。部長、ポケットティッシュありがとう。みんなも、ありがとう。僕は三三歳になりました。…十二月三日、一時帰宅、三時出発。みほ、気に入って貰えましたか？あのぬいぐるみは大きいから高かった。僕はこれからもっと働く。たくさんネジを見ていく。頑張ります。」

山本、やっつけてきて、ノートを書く。

吉田 三時、帰って来る。食器は使った人が洗うように。」

みほ、やっつけてきて、ノートを書く。

吉田 「岩永さん、夜の九時から十一時までには私寄りません。あと星野さん、正月の話ですが、私は休みはありません。年中無休なので、どこか行くならどうぞ。私はその時間借りますよ。」

星野、やっつけてきて、ノートを書く。

吉田 「十二時帰宅。いや、聞いただけです。僕も休みはありません。正月だからとか、もう関係ないです。すから。君には負けません。岩永さん、僕借ります。一時間五〇〇〇円でもいいですか？」

岩永、やっつけてきて、ノートを書く。

吉田 「二時間五〇〇〇円、はい、あと無いですか？彼女さん、このままだと星野さんの持ち時間十二時間になりまして、負けちゃいますよ。」…あなた、そういうキャラだったんですか？

山本 十二月二七日、一時帰宅。三時出発。

吉田 …あれ？鬼頭さんは？

山本 みほ、みほ、みほ、みほ、

みほ うるせえよ。山本、お前借りろ。九時から十一時。私は仕事だから。十二時家を出る。

星野 僕借ります、一時間六〇〇〇円払います。夜九時家を出る。ねえ鬼頭君？…鬼頭君、居る？

岩永 はい、六〇〇〇円来た。他無いですか？他

僕、井一杯の枝豆を食べ終えて、

僕 もう時間だ、行かないや。

僕、食器を片付けに台所へ。

吉田 もうすぐ十二月二八日です。まだ鬼頭さんの書き込みはありません。これをめぐるど、今日になってしまいます。この先は、白紙ですか？…白紙は白紙で怖いです。…書いてあつても怖いです。僕は、どうしたらいいですか？…

かなこ、ノートをめぐる。

山本 十二月二八日、一時帰宅三時出発。もう今年も終わりですね。よいお年を。(去る)

みほ 三時帰宅、正月とか今更関係ないですから。いつもより忙しいってだけです。十二時家を出る。

(去る)

星野 十二時帰宅。鬼頭君…？ねえ、鬼頭君、大丈夫？九時出発。(去る)

岩永 九時に来ました。今年はキリが悪いので、来年からこの時間は星野さんにお貸ししますね。一時間七〇〇〇円です。(去る)

かなこ、立ち上がる。  
その瞬間、吉田、かなこと目が合う。

吉田 ……!

かなこ ……。

吉田 ……あ、あの、

かなこ はい。

吉田 あ、みほさん、ですか？

かなこ え？

吉田 ……あ、…かなこさん？

かなこ はい。

吉田 あ、あの…、僕ずっと、ノート読んでました。この…、

吉田、ノートを持ち、ページをめくると、

吉田 ……!と、書いてある…。

僕 荷物を抱えて台所からやってきた。

僕 結局、タバスコや酢はどこに行っちゃったんだろうね、

僕 吉田と目が合う。

吉田 ……!と、鬼頭さん？

僕 ……はあ、また知らない人が増えた。

吉田 あ、あの僕

僕 うん、いいよ。それは僕に聞かなくても、

「全部ここに書いてありますから。」

吉田、ページをめくる。

「こっやって誰も知らない人が入ってきて、持って行っちゃうんだなきつと。」

吉田 ……あの僕、ちよつとわからないんですけど、…と言っている(これも書いてあるんですけど…)

「この部屋には今、何人居るかわからないな。」

吉田 僕はですね、普通に家賃を払ってるんです、四五〇〇〇円。

「何時間？」

吉田 二四時間に決まってるじゃないですか、だってここは僕の部屋なんですから。

「僕もよくそう言ってたんだ。」

吉田 ……僕は今、誰と話してるんだ？

かなこ もうすぐ大みそかですね。

吉田 え？

「今年も早かった。知ってるかい？枝豆を植えると枝豆が生えるんですよ。だから枝豆は、

種なんですよ。」

かなこ 食べられる種の事を豆と言っんですよね。

「あ、知ってた。」

かなこ それは星野さんの言い分ですね。

「よく考えたらわからない話なんだ。だってひまわりの種は、あれはなんたい？」

かなこ あれは種ですよ。だって植えたらひまわりが生えて来ますから。

「でも食べられる。」

僕とかなこ、会話なのかかなこの独り言なのかわからない状態で部屋から出ていく。

かなこ ということは、ひまわりの「豆」ですね。

「そういう事なんだね。」

かなこ アーモンドは？

「アーモンドはアーモンドだろう。だってアーモンドを植えてもアーモンドは生えて来ない。」

かなこ じゃあ柿の種は？

「それは食べられる柿の種かい？だとしたらそれはお菓子だろう。食べられない柿の種ならそれは種だろう。」

かなこ こまは？

吉田、ノートを机に置いて、しばらくポーツとじている。

「こまは、こまだろう。」

「とおか。」

「君、小さくて食べられる物はみんな豆だと思ってるんじゃないのかい？」

かなこ 僕、空を見上げると雨が降ってきたようで、傘をさす。

二人一緒に去っていく。

「じゃあこまは、なんですか？」

「こまは、」

「こまは、」

「お、こまの話になっちゃったじゃないか。」

「あ、あ…。」

吉田、立ち上がり、部屋を見回す。

とりあえず枕の匂いを嗅いでみる。

次に財布から小銭を取り出し、頭を掻きながら出て行った。

部屋には誰も居ない。

ノートがめくれた。

〜終〜

【上演記録】 2012年4月27日～30日

於・七ツ寺共同スタジオ

作・演出／平塚直隆・舞台監督／柴田頼克・照明／今津知也

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oyster@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oyster@yahoo.co.jp)